

# 地元志向と心理的特性との関連

## ——新たな発達モデルの構築に向けて——

米原拓矢\* 田中大介\*\*

### Relationship between Local-Oriented Mind and Personal Characteristics ——Toward an Understanding of Attachment to Birthplace in Life Course——

YONEHARA Takuya\*, TANAKA Daisuke\*\*

キーワード : 発達課題, 地元志向, パーソナリティ, コスモポリタニズム, 心理的離乳

Key Words : developmental task, local-oriented mind, personality, cosmopolitanism, psychological weaning

## 問題と目的

### 新たな発達モデルの必要性と「地元志向」

地方に生まれ育った若者は、東京や大阪といった大都市圏に生まれ育った若者に比べ、進学や就職の選択の幅が少ない。そのため、生まれ育った地域に自らのニーズに合致する選択肢がない場合が多く、結果として生まれ育った地域を離れる割合が多い。いわゆる「故郷を離れ上京する若者」は、近現代における都市集約型の社会システムにおける帰結であり(石黒・李・杉浦・山口,2012),若年層の人口移動は、都市圏への一極集中を所与とする構造に基づいて社会的あるいは経済学的に説明されてきた。

一方、こうした若者の移動は心理社会的における発達課題としても解釈されてきた。例えば Erikson (1959 西平・中島訳 2011) の発達段階モデルでは、青年期において自らのアイデンティティを模索する過程が想定されている。この枠組みの中で地方に生まれ育った若者の発達について考えると、青年期に親元を離れ大都市圏へと向かう選択をする若者は、この発達段階モデルの想定する青年期の発達期待にうまく合致しているといえる。その一方で、親元すなわち生まれ育った地域に留まるという選択をする若者は、少なくとも表面的には、親の権威に盲従するフォークロージャー型 (Marcia,1966) と類型化され、否定的に評価される傾向にある。

しかし、われわれの文化・社会をより広範な空間的広がりをもって、あるいはより長期的な時間展望に立って俯瞰したとき、上記した心理社会的発達期待の限界が認識される。すなわち、こうした「故郷を離れる」発達モデルは、近現代における都市集約型の産業社会においてのみ適応的なのである。伝統的な共同体を考えたとき、あるいは地方のコミュニティの持続性を念頭に置いたときには、「故郷を離れる」発達モデルは、むしろ人材を枯渇させる呪縛として機能しているともいえる(吉川,2001)。今後、複数の持続可能社会が水平方向でつながるような共存社会を目指すのであれば、こうした発達期待はその多様性のひとつの選択肢に過ぎない (Rogoff,2003 当真訳 2006)。よ

---

\* 鳥取大学地域学研究科

\*\* 鳥取大学地域学部

って、これまでの発達モデルとは異なる、新たな発達モデルの構築が必要となってくるであろう。

しかし、新たな発達モデルの構築について考えるうえで、まず現状について調査する必要がある。つまり、青年期に親元すなわち生まれ育った地域に留まるという選択をする者が、否定的に評価される傾向にあるというのが前提となるが、それが実情を反映していない評価であるとすれば、実際は旧来の発達モデルとは異なる、新たな発達の姿が自然と見られるようになってきていることとなり、学問研究の立場からあえて新たな発達モデルを構築し、提示する意義が弱まってしまうためである。

以上より本研究では、生まれ育った地域に留まろうという志向、つまり一般的な言葉で言えば「地元志向」がどのような個人的特性と関わっているのか、ということについて検討する。「地元志向」については、長期不況によって地元以外でも望ましい仕事を見つけにくくなっているという就業機会減少(太田,2003)といった経済的要因との関連が指摘されたり、社会学的な観点からは、長男や長女が少子化に伴って増える長男長女社会(樋口,2004)との関連が指摘されたりしている。しかし、このような環境的要因に焦点が当てられる一方で、個人的特性との関連にはあまり焦点が当てられていない。今後新たな発達モデルを考えていくうえで、「地元志向」と、それぞれの個人の中で発達してきた個人的特性との関連について明らかにすることは意義のあることだと考えられる。

### 本研究における「地元」「地元志向」の定義

まず、本研究における「地元」を定義する。これまで「地元」という言葉は、一般的によく用いられてきた。しかし、その言葉の定義は、一定のものではなく、曖昧な意味で使われることも多い。そこで本研究では、「地元」という地域を、個人が発達していく中でその地域がどのように捉えられるか、といった観点から定義する。

Bronfenbrenner(1979 磯貝・福富訳 1996)は、発達を“人がその環境を受けとめる受けとめ方や環境に対処する仕方の継続的な変化である”と定義している。そして、“人間の行動や発達に重要な作用をしている外的影響は、客観的な物理的条件や事象といった言葉だけで記述できるものではない”としたうえで、行動や発達を科学的に理解するために切り離せない環境は、環境中であるいは環境と相互作用をする人間によって、それがどのように認知されるのかが問題となる、としている。

よって、この考え方を踏まえると、発達の観点から「地元」を見ていくためには、例えば“卒業した高校の都道府県”といったような客観的な定義ではなく、個人がその環境、つまり自分の生まれ育った地域をどのように認知しているかという主観的な意味を含んだ定義をする必要がある。

以上より、本研究では、「地元」をある個人が自分の育ってきたと認知する地域と定義する。さらに、「地元志向」はある個人が自分の育ってきたと認知する地域(=地元)へと向かう志向と定義できる。以下の文章で用いる「地元」「地元志向」はこの意味で用いる。

### 地元志向の要素

このように定義した地元志向の要素としては、まず地元で定住したいという気持ちがその一つとなると仮定される。なぜならば、そのような気持ちは、その人自身が地元で身を置きたい気持ちであるから、地元へと向かう志向と考えられるためである。前村(2011)は、居住する土地(場所)の移動に関する価値や志向に焦点をあて、定住を表す心理的特性として定住志向を検討している。前村(2011)は、相羽・池上・君島・戸沼(1977)を参考に定住志向の程度を測る尺度を作成した。この尺度は「今とは環境が異なる場所で、生活をしてみたい」、「基本的には、1つの場所に腰を据

えて生活した方が良い」といった6項目からなり、出身地だけに限定しないものとして定住志向を測定するものである。本研究における地元志向のうち、地元に住住したいという気持ちは、「地元への」定住志向と言えるものであると考えられる。

一方で、ある人が地元に住住したいという気持ちを持っていなくても、地元における人や場所に対する愛着を持っていることが考えられる。このような愛着は、その人自身が地元以身を置きたいか否かとは別に、心的な意味で地元へと向かう志向と考えられる。よって、本研究で定義した地元志向の2つ目の要素として、地元への愛着が仮定される。

### 地元志向との関連が仮定されるもの

**パーソナリティ** このような地元志向に関連するものとして、まず個人のパーソナリティが考えられる。パーソナリティは、“人の、広い意味での行動（具体的な振る舞い、言語表出、思考活動、認知や判断、感情表出、嫌悪判断など）に時間的・空間的一貫性を与えているもの”（神村,1999）といたように定義される。青森県出身の若者を対象とした調査において、県外に進学した者は、県内に留まって進学した者と比較して、対人不安が低い傾向が確認されている（石黒,2007）。また、7000人を超えるアメリカ人を10年に渡って追跡した大規模な調査（Oishi & Schimmack,2010）では、外向的な性格の持ち主が、移動による精神的健康への悪影響を受けにくいことが示されている。さらに、前村（2011）は、少なくとも最近までの日本では、住む場所を大きく変えるような移動をする緊急性は低く、今いる土地に居続けるか、他に移動するかは個人の選択に任されていることが多いため、定住と移動に機能する要因の一つとしてパーソナリティを予想している。これらのことから、地元志向は、環境的要因だけでなく、個人のパーソナリティとの関連が仮定される。

パーソナリティ研究には、パーソナリティを構成するいくつかの変数（共通特性）の程度を量的に測定し、それらの組み合わせでパーソナリティを記述、説明しようとする特性論という立場がある（和田,1996）。その中で、人の性格が「主要な（Big）」「5因子（Five）」（外向性、誠実性、情緒不安定性、開放性、調和性）で必要十分に記述できると考えるビッグファイブ論がある（林,2013）。

この理論に基づいて、和田（1996）は60項目からなるBig Five尺度を作成し、文章形式の性格テストである新性格検査（柳井・柏木・国生,1987；国生・柳井・柏木,1990）との併存的妥当性を確認している。そこでは、Big Five尺度と、新性格検査の12の性格特性尺度を因子分析している。尺度単位での因子分析では、Big Five尺度のうち、「社交的」「話好き」などの項目から表される外向性が、新性格検査の外向性尺度、活動性尺度と同じ因子に含まれた。また「計画性のある」「几帳面な」などの項目から表される誠実性は、新性格検査の持久性尺度、規律性尺度と、「不安になりやすい」「心配性」からなる情緒不安定性は、新性格検査の神経質尺度、抑うつ性尺度、劣等感尺度と、「多才の」「進歩的」からなる開放性は、新性格検査の進取性尺度、自己顕示性と、「温和な」「寛大な」からなる調和性は、新性格検査の攻撃性尺度、非協調性尺度、共感性尺度とそれぞれ同じ因子に含まれた。

**コスモポリタニズム** 次に、地元志向に関連する概念として、コスモポリタニズム（国際主義、cosmopolitanism）を考慮する必要がある。岩田（1989）は、急速な国際化の中で重要となる「心の国際化」を表すもっとも適切な言葉としてコスモポリタニズムを挙げており、「反“自民族優秀性”意識」「異文化体験指向」「地球運命共同体意識」「国家不要意識」の4つの下位尺度からなるコスモポリタニズム尺度を作成している。岩田（1989）によると、日本人の異文化適応研究が注目され始めたばかりの当時、「異文化」はある個人が赴く特定の国や地域を指すことがほとんどであったのに対し、コスモポリタニズムは、国や地域を特定せずに、どの文化圏への異文化適応をも規定するよ

うな要因の中核をなすものとして位置づけられていたという。よって、コスモポリタニズムの強い者は、地元以外の地域への適応がより容易であると考えられるため、地元志向が弱いと仮定される。

前村 (2011) は、岩田 (1989) のコスモポリタニズム尺度のうち、「異文化体験指向」に表されるような、願望や意図などの個人特性に特化した概念として異文化志向をとらえ、異文化志向が定住志向と負の関連性を持つという仮説を質問紙調査によって検証し、結果はこの仮説を支持するものとなった。ここでの定住志向は、出身地だけに限定しないものとして測定されているが、本研究における地元限定したもの、つまり地元への定住志向も、異文化志向と負の関連性があることが予想される。

また、岩田 (1989) は、自民族中心主義 (ethnocentrism) に反する態度を反“自民族中心主義”としてコスモポリタニズムの1次元とした。自民族中心主義は、Sumner(1906 青柳・園田・山本訳 1975) によって提唱された概念であり、自分の文化を優れたものとし、他の文化をより劣ったものと無条件に判断する傾向がある考え方である。地元志向の強い者について考えたときに、他の地域について知ったうえで、自分の育ってきた地域に他の地域にはない良い部分を見出しているために、地元志向が強くなっている者もいると考えられる。一方で他の地域についてそれほど知ることなく、地元志向が強い者の存在も考えられる。特に後者の地元志向を規定している要因として、自民族中心主義的な態度が仮定される。よって、自民族中心主義も、地元志向との関連が予想される。

**親子関係** 最後に、地元志向に関連すると考えられるのは、親子関係である。谷井・上地 (1993) は、親子関係は発達的に変容していくものであり、子どもが思春期・青年期の発達課題である「第2の分離-個体化」の時期を経るとき、親子関係は質的に大きな変容を遂げると考え、親子関係のあり方と、子どもの親からの心理的な自立との関連について示唆している。この考えをふまえると、親からの心理的な自立が見られる関係性であれば、子が親元を離れることにつながる。親元を離れるということは、確実ではないにしろ、地元を離れることにもつながる。一方で、親からの心理的な自立の見られない関係性、例えば親に依存している関係性であれば、親元を離れる選択をするとは考え難く、地元からも離れないことになる。結果として地元志向が強くなると考えられる。よって、親子関係のうち、特に親からの心理的な自立のできていない関係性、つまり Hollingworth(1928) の言う心理的離乳の不十分な関係性は、地元志向を強めると仮定される。

心理的離乳についての考え方としては、思春期における親からの離脱や依存性の払拭に重点を置く第一次心理的離乳、青年期後期における、第一次心理的離乳後に育つべき自律性に重点を置く第二次心理的離乳、さらに本来の自分らしい生き方を確立する課題としての第三次心理的離乳といったように3つの段階に分けて考えたもの (西平,1990) など、心理的離乳の概念自体、または心理的離乳に至るまでの親子関係をいくつかの段階に分けて、その過程を捉えようとした研究が見られる (落合・佐藤,1996;池田・大竹・落合,2006 など)。

そのような研究のうち、小高 (1998) は、心理的離乳の過程を捉える1つの枠組みを提案するために、大学生を対象とした質問紙調査を行った。小高 (1998) は、青年が親に対してどのような態度・行動を持っているかということに焦点を当て、高木・藤田 (1988)、小沢・湯沢 (1989) を参考に、広範囲から項目を収集、因子分析し、その構造を分析した。その結果、息子-父、息子-母、娘-父、娘-母のいずれの組においても、「親からのポジティブな影響」「親との対立」「親への服従」「親との情愛的絆」「一人の人間として親を認知」の5つの類似した因子が存在することを示した。そして小高 (2000) は、どの程度親から心理的に離乳しているかを測定する尺度を作成することを目的として、小高 (1998) で抽出された5つの因子を元に、それぞれの因子に負荷を示す項目を5

項目ずつ選択した 25 項目からなる尺度を作成した。

### 本研究の目的

本研究では地元志向にどのような個人的特性が関連しているのかを明らかにする。ここまでの議論より、地元志向は、パーソナリティ、異文化志向、自民族中心主義、親子関係の 4 つの個人的特性との関連が仮定される。本質的には地元志向とこれらの特性は、相互に影響し合うものであると考えられるが、本研究ではこれらの個人的特性を説明変数とし、重回帰分析を行うことで、従属変数としての地元志向を説明しうるかを分析する。

## 方法

**調査対象** 鳥取大学の学生 1 年～4 年計 290 名（男 152 名，女 138 名，平均年齢 19.6 歳（標準偏差 =1.48），大学 1 年生 190 名，2 年生 51 名，3 年生 31 名，4 年生 16 名，大学院 1 年生 2 名）に回答を依頼した。

**調査時期** 2013 年 11 月 19 日～12 月 3 日に実施した。

**調査方法** 3 つの講義の開始時に、個別自記入形式の質問紙調査を集合調査形式で実施した。それぞれの講義の受講者は重複しておらず、謝礼は提示しなかった。回答はいずれも無記名で行われ、実施時間は約 15 分であった。

**調査内容** 本調査の質問紙はフェイスシートと 4 つの質問項目群から構成された。フェイスシート以外のそれぞれの項目への回答は、全て「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。以下、質問紙の内容について説明する。

**フェイスシート** 研究の目的、質問紙の活用方法、注意点、調査結果の報告と質問への対応について記し、年齢、学部・学科・学年、性別の記入を求めた。また、留学生である場合はチェックボックスにチェックするように求めた。

**Big Five 短縮版** パーソナリティ特性の 5 因子モデルを測定する尺度（和田,1996）の短縮版を用いた。和田（1996）の尺度は、外向性、誠実性、情緒不安定性、開放性、調和性を測る 5 つの下位尺度からなり、それぞれ 12 項目ずつの計 60 項目である。今回は 4 つの尺度を併用するため、1 つの尺度の項目数が多くなることによって、他の尺度においてより正確なデータを得られないことが危惧された。そのため、和田（1996）の尺度を元に作成された並河・谷・脇田・熊谷・中根・野口（2009）の短縮版を使用した。こちらも上記の 5 因子を測る 5 つの下位尺度からなるが、計 29 項目である。「現在のあなた自身のことについてお聞きします。あなたが考えるあなた自身の性格について、それぞれ最もあてはまるものに丸をつけてください」という教示で回答を求めた。

**地元志向尺度** 本研究で定義した地元志向を測るために本研究で新たに作成した尺度である。「地元への定住志向」「地元への愛着」の 2 つの下位尺度からなり、それぞれ 6 項目ずつの計 12 項目で構成した。「地元への定住志向」の項目に関しては、前村（2011）の作成した定住志向尺度の項目のうち、「今とは環境が異なる場所で、生活してみたい」を「将来地元とは環境が異なる場所で、生活してみたい」とし、「慣れ親しんだ場所であっても、同じところにずっと住むのは嫌だ」を「慣れ親しんだ場所であっても、地元にならなくて住むのは嫌だ」とし、「基本的には、一つの場所に長く腰をすえて生活した方がよい」を「基本的には、地元にならなくて腰をすえて生活した方がよい」として、

それぞれ地元への定住に限定する内容に変更して使用した。また、「地元への愛着」の項目については、地元における親、友だちといった人に対する愛着や、地元という場所に対する愛着に関する項目を作成した。項目内容は Table 1 に示す。「あなたの地元に対する意識についてお聞きします。それぞれ最もあてはまるものに丸をつけてください。」という教示で回答を求めた。

Table 1  
地元志向尺度の項目

(地元への定住志向)	
Q2-1	将来地元とは環境が異なる場所で、生活してみたい (※)
Q2-2	できるだけ自分の育ったところからは離れたくない
Q2-3	自分の住む場所は、(先祖) 代々決まっている
Q2-4	人は自分の好みや都合によって、いつでも住む地域を移動すればよい (※)
Q2-5	慣れ親しんだ場所であっても、地元ずっと住むのは嫌だ (※)
Q2-6	基本的には、地元で長く腰をすえて生活した方がよい
(地元への愛着)	
Q2-7	できるだけ親の近くにいたいと感じる
Q2-8	友達のなかで、自分のことを最も理解してくれるのは地元の友だちである
Q2-9	地元で暮らす人たちの人柄が好きである
Q2-10	他のところにいるときよりも、やっぱり地元にいるときが落ち着く
Q2-11	自分が地元の一員であるのを感じる
Q2-12	地元について良いことや悪いことを言われると、自分のことのように感じる

(注) (※) は逆転項目

**異文化志向尺度と自民族中心主義尺度** 異文化志向尺度は、前村 (2011) の作成した、コスモポリタニズムの一次元としての異文化志向の程度を測る尺度であり、14 項目からなる。自民族中心主義尺度は、岩田 (1989) の作成したコスモポリタニズム尺度の下位尺度の一つである、反“自民族優秀性”の項目を、自民族中心主義の程度を測るものとして使用した。使用にあたっては、現代の日本の実情にそぐわない 2 項目 (「日本の大幅な貿易黒字は優れた技術と努力の結果なので仕方がない」「わが国の大幅な貿易黒字は日本人の優秀さを証明している」) を削除した。さらに、留学生の回答者を配慮して一部内容を変更した。4 項目からなる。「あなたの異文化への関心や国に対する意識についてお聞きします。それぞれ最もあてはまるものに丸をつけてください。」という教示で回答を求めた。

**親-青年関係尺度** 小高 (2000) によって作成された、どの程度親から心理的離乳をしているかを測定する尺度である。「親からのポジティブな影響」「親との対立」「親への服従」「親との情愛的絆」「一人の人間として親を認知」の 5 つの下位尺度からなり、それぞれ 5 項目ずつの計 25 項目を父母それぞれに関して回答を求めため、計 50 項目である。小高 (2000) では、この 5 つの下位尺度を、因子数を 2 つに定めようとして主成分分析し、抽出した 2 つの因子 (「親への親和」「親への従属」) の高低によって、心理的離乳の程度が A 型 (密着した関係)、B 型 (矛盾・葛藤的な関係)、C 型 (離反的な関係)、D 型 (対等な関係) の 4 つのどの段階であるか測定するという手続きがとられ

ていた。しかし本研究では、どのような親子関係が地元志向へ影響を与えているかを分析することを目的としているため、上記のような手続きをとらず、父母それぞれとの親子関係を5つの側面からとらえて、それぞれの関係性の程度を測定する尺度としてこの尺度を使用した。「あなたとあなたのご両親との関係についてお聞きします。それぞれ最もあてはまるものに丸をつけてください。(健在でない父親、母親との関係については書かれなくても良いです。)」という指示で回答を求めた。

## 結果

### 有効回答者

本研究における質問紙調査では、親が健在でない回答者を除いて、無記入項目のある回答者がいた(27名)が、そのうち無記入項目が10項目以上ある回答者のみを分析から除外した(4名)。また、両親がどちらも健在である回答者と、どちらかが健在ではない回答者がいたが、両者では親の存在や、親子関係の意味も異なることが考えられるため、今回は両親のどちらかが健在ではない回答者も分析から除外した(10名)。また、留学生も分析から除外した(3名)。これらの基準によって分析から除外された回答者は17名であり、有効回答者は273名となった(男147名、女126名、平均年齢19.5歳(標準偏差=1.25)、大学1年生180名、2年生47名、3年生31名、4年生13名、大学院1年生2名)。

### 得点化について

質問紙の回答は全て5件法で回答を求めた。全ての尺度において「非常にあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点(逆転項目は1~5点)に得点化した。

### 地元志向尺度の因子構造の検討

地元志向尺度は、質問項目の候補を収集し、予備調査を経た上で項目を決定するといった手続きを取ることなく、地元志向が2つの要素からなるものと仮定して項目を作成し、質問紙調査に至った。そのため、一般的な方法ではないが、まず地元志向尺度の因子分析を通して、地元志向として仮定された2つの要素が因子として抽出されるかどうかを確認し、項目を検討した上で重回帰分析を行った。

**地元志向尺度の因子分析** 地元志向尺度の全12項目に対して、因子分析を行った。分析には最尤法を用いて、バリマックス回転を行った。本研究の仮定より、因子数を2に設定して因子を抽出した(Table 2)。2因子の累積寄与率は47.4%であった。回転前の固有値は、第1因子3.62、第2因子2.07、第3因子1.18であった。

以下、因子分析の結果を示す。第1因子への負荷量が.400以上の項目は、Q2-2「できるだけ自分の育ったところからは離れたくない」、Q2-1「将来地元とは環境が異なる場所で、生活してみたい」、Q2-6「基本的には、地元で長く腰をすえて生活した方がよい」、Q2-5「慣れ親しんだ場所であっても、地元でずっと住むのは嫌だ」、Q2-7「できるだけ親の近くにいたいと感じる」であった。第1因子は、得点が高くなるほど地元を離れる意志が弱く、地元への定住を拒まない、もしくはそれを望むことを示す項目で構成されているため、当初想定したように、地元への定住志向を示す因子であると解釈された。

Table 2  
 地元志向尺度の因子分析 (回転後の因子負荷量)

	因子 1	因子 2
因子 1 : 地元への定住志向		
Q 2-2 できるだけ自分の育ったところからは離れたくない	<b>.786</b>	.069
Q 2-1 将来地元とは環境が異なる場所で、生活をしてみたい (※)	<b>.713</b>	.069
Q 2-6 基本的には、地元で長く腰をすえて生活した方がよい	<b>.686</b>	.067
Q 2-5 慣れ親しんだ場所であっても、地元でずっと住むのは嫌だ (※)	<b>.616</b>	.024
Q 2-7 できるだけ親の近くにいたいと感じる	<b>.503</b>	.165
因子 2 : 地元への愛着		
Q 2-11 自分が地元の一員であるを感じる	.144	<b>.821</b>
Q 2-9 地元で暮らす人たちの人柄が好きである	.096	<b>.712</b>
Q 2-10 他のところにいるときよりも、やっぱり地元にいるときが落ち着く	.319	<b>.669</b>
Q 2-12 地元について良いことや悪いことを言われると、自分のことのように感じる	.135	<b>.523</b>
Q 2-8 友達のなかで、自分のことを最も理解してくれるのは地元の友だちである	-.011	<b>.450</b>
いずれの因子にも高い負荷を示さなかった項目		
Q 2-3 自分の住む場所は、(先祖) 代々決まっている	.218	.129
Q 2-4 人は自分の好みや都合によって、いつでも住む地域を移動すればよい (※)	.199	.087
	負荷量の平方和	2.466 2.170
	寄与率 (%)	20.5 18.0

(注) (※) は逆転項目

第2因子への負荷量が.400以上の項目はQ2-11「自分が地元の一員であるを感じる」、Q2-9「地元で暮らす人たちの人柄が好きである」、Q2-10「他のところにいるときよりも、やっぱり地元にいるときが落ち着く」、Q2-12「地元について良いことや悪いことを言われると、自分のことのように感じる」、Q2-8「友達のなかで、自分のことを最も理解してくれるのは地元の友だちである」であった。これらの項目は、地元の人や、地元という場所に対する愛着を表す項目で構成されているため、総じて地元への愛着を示す因子であると解釈された。

Q2-3「自分の住む場所は、(先祖)代々決まっている」、Q2-4「人は自分の好みや都合によって、いつでも住む地域を移動すればよい」はいずれの因子にも明確に分けられなかった。

**地元志向尺度の項目の検討** 地元志向として仮定された2つの要素が因子として抽出されるかど



うかを確認するために、地元志向尺度の因子分析を行った。その結果、「地元への愛着」について尋ねる項目として作成したQ2-7「できるだけ親の近くにいたいと感じる」が地元への定住志向を示す因子に含まれたことを除けば、Q2-3、Q2-4以外の全ての項目が、項目作成時に意図した通り、地元への定住志向を示す因子と、地元への愛着を示す因子の2つに分かれた。よって、「地元への定住志向」を示す5項目(Q2-1、Q2-2、Q2-5、Q2-6、Q2-7)と、「地元への愛着」を示す5項目(Q2-8、Q2-9、Q2-10、Q2-11、Q2-12)を選択して、以下の解析で用いることとした。

### 地元志向に影響を与える個人的特性の検討

次に、パーソナリティ、異文化志向、自民族中心主義、親子関係の4つの個人的特性が、それぞれ地元志向にどのように影響を与えているのか分析するために、4つの要因を測定した尺度の得点、さらにフェイスシートのデータを説明変数、地元志向尺度の2つの得点を従属変数として、それぞれ重回帰分析を行った。解析は全て強制投入法を用いた。フェイスシートでは、年齢、学部・学科、学年、性別の記入を求めたが、年齢、学年に関しては人数の偏りが見られたため、今回は学部と性別のみ分析に用いた。学部、性別はダミー変数として扱い、学部(工学部、地域学部、農学部、医学部)は、所属していない学部を0、所属している学部を1として、性別は男を0、女を1とした。また、以下の解析における有意水準は全て5%とした。

**パーソナリティ** はじめに、パーソナリティが地元志向に与える影響を分析するために、Big Five短縮版(並河他,2009)の得点、学部、性別を説明変数、地元志向尺度の得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果を以下に示す(Table 3 参照)。

「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は1.6%であり、一定の説明率を持たなかった( $F_{(9,256)}=1.465, n.s.$ )。パーソナリティが地元への定住志向に与えている影響は見られなかった。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は8.8%であり、一定の説明率を有した( $F_{(9,258)}=3.875, p<.001$ )。標準化係数は、「開放性」が有意な正の係数( $\beta=.141, p<.05$ )を示し、「調和性」も有意な正の係数( $\beta=.218, p<.01$ )を示した。この結果、パーソナリティのうち、調和性と開放性が地元への愛着を強める影響を与えていることが明らかになった。

**異文化志向、自民族中心主義** 次に、異文化志向、自民族中心主義が地元志向に与える影響を分析するために、異文化志向尺度(前村,2011)、自民族中心主義尺度の得点、学部、性別を説明変数、地元志向尺度の得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果を以下に示す(Table 4 参照)。

「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は10.0%であり、一定の説明率を有した( $F_{(6,261)}=5.943, p<.001$ )。標準化係数は、「異文化志向」が有意な負の係数( $\beta=-.297, p<.001$ )を示し、「自民族中心主義」が有意な正の係数( $\beta=.136, p<.05$ )を示した。この結果、異文化志向の強さは、地元への定住志向を弱める影響を与えており、自民族中心主義の強さは、地元への定住志向を強める影響を与えていることが明らかになった。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は13.1%であり、一定の説明率を有した( $F_{(6,263)}=7.746, p<.001$ )。標準化係数は、「自民族中心主義」が有意な正の係数( $\beta=.326, p<.001$ )を示した。この結果、自民族中心主義の強さが、地元への愛着を強める影響を与えていることが明らかになった。

Table 3  
重回帰分析の結果 (パーソナリティ)

	地元志向	
	地元への定住志向	地元への愛着
パーソナリティ		
外向性	.064	.016
誠実性	-.036	-.058
情緒不安定性	.055	.015
開放性	-.109	.141*
調和性	.068	.218**
性別	.002	.102
R <sup>2</sup>	.016	.088

(注) \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 4  
重回帰分析の結果 (異文化志向, 自民族中心主義)

	地元志向	
	地元への定住志向	地元への愛着
異文化志向	-.297***	.024
自民族中心主義	.136*	.326***
性別	.046	.029
R <sup>2</sup>	.100	.131

(注) \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

**親子関係** 最後に、親子関係が地元志向に与える影響を分析するために、親-青年関係尺度 (小高,2000) の得点, 学部, 性別を説明変数, 地元志向尺度の得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果を, 以下に示す (父親との親子関係は Table 5, 母親との親子関係は Table 6 を参照)

親-青年関係尺度 (小高,2000) の父親に関する項目の得点, 学部, 性別を説明変数として, 「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果, 説明率は 3.9% であり, 一定の説明率を有した ( $F_{(9,255)}=2.176$ ,  $p < .05$ )。標準化係数は, 「一人の人間として父親を認知」が有意な負の係数 ( $\beta = -.173$ ,  $p < .01$ ) を示した。この結果, 父親との親子関係において, 一人の人間として父親を認知している関係性は, 地元への定住志向を弱める影響を与えていることが明らかになった。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした解析の結果, 説明率は 9.0% であり, 一定の説明率を有した ( $F_{(9,256)}=3.918$ ,  $p < .001$ )。標準化係数は, 「父親との情愛的絆」が有意な正の係数 ( $\beta = .282$ ,  $p < .001$ ) を示し, 「一人の人間として父親を認知」が有意な負の係数 ( $\beta = -.194$ ,  $p < .01$ ) を示した。この結果,

父親との親子関係において、父親との情愛的絆を感じている関係性は、地元への愛着を強め、一人の人間として父親を認知している関係性は、地元への愛着を弱める影響を与えていることが明らかになった。

親-青年関係尺度（小高,2000）の母親に関する項目の得点、学部、性別を説明変数として、「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は6.6%であり、一定の説明率を有した（ $F_{(9,256)}=3.064, p<.01$ ）。標準化係数は、「母親からのポジティブな影響」が有意な正の係数（ $\beta=.155, p<.05$ ）を示し、「一人の人間として母親を認知」が有意な負の係数（ $\beta=-.178, p<.01$ ）を示した。この結果、母親との親子関係において、母親からポジティブな影響を受けている関係性は、地元への定住志向を強める影響を与えており、父親の場合と同様に、一人の人間として母親を認知している関係性は、地元への定住志向を弱める影響を与えていることが明らかになった。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は6.9%であり、一定の説明率を有した（ $F_{(9,258)}=3.189, p<.01$ ）。標準化係数は、「母親との情愛的絆」が有意な正の係数（ $\beta=.161, p<.05$ ）を示し、「一人の人間として母親を認知」が有意な負の係数（ $\beta=-.152, p<.05$ ）を示した。この結果、母親との親子関係においても、父親の場合と同様に、母親との情愛的絆を感じている関係性は、地元への愛着を強め、一人の人間として母親を認知している関係性は、地元への愛着を弱める影響を与えていることが明らかになった。

Table 5  
重回帰分析の結果（父親との親子関係）

	地元志向	
	地元への定住志向	地元への愛着
父親との親子関係		
父親からのポジティブな影響	.077	-.131
父親との対立	-.022	-.012
父親への服従	-.039	.084
父親との情愛的絆	.094	.282***
一人の人間として父親を認知	-.173**	-.194**
性別	.016	.092
R <sup>2</sup>	.039	.090

(注) \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 6  
重回帰分析の結果 (母親との親子関係)

	地元志向	
	地元への定住志向	地元への愛着
母親との親子関係		
母親からのポジティブな影響	.155*	.020
母親との対立	-.039	-.018
母親への服従	-.058	.063
母親との情愛的絆	.076	.161*
一人の人間として母親を認知	-.178**	-.152*
性別	.001	.078
R <sup>2</sup>	.066	.069

(注) \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

### 目的外の解析

最後に、目的とは異なるが、学部、性別の違いによって地元志向尺度の得点の高低に違いが生じるかどうかについて解析を行った。

**地元志向の学部による差** まず、学部の違いによって地元志向尺度の得点の高低に違いが生じるかどうかを明らかにするために、学部ごとの「地元への定住志向」得点の平均値の差の検定を行った。学部ごとの「地元への定住志向」得点の平均値を Figure 1 に示す。一元配置分散分析の結果、学部の主効果が見られた ( $F_{(3,267)}=3.227, p<.05$ )。多重比較 (Tukey 法) の結果、工学部 (平均 13.90 点) よりも地域学部 (平均 16.03 点) の得点の方が有意に高かった ( $p<.05$ )。工学部の学生より、地域学部の学生の方が、地元への定住志向が強いことが明らかになった。

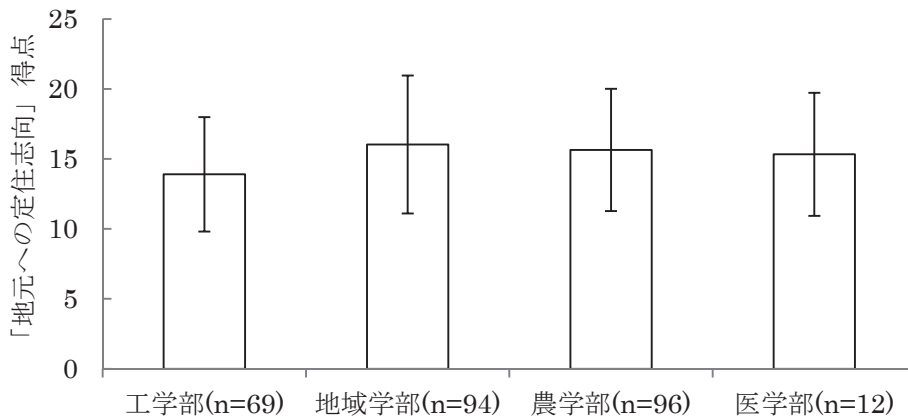


Figure 1. 学部ごとの「地元への定住志向」得点の平均値

そして、学部ごとの「地元への愛着」得点の平均値の差の検定を行った。学部ごとの「地元への愛着」得点の平均値を Figure 2 に示す。一元配置分散分析の結果、学部の主効果が見られた ( $F_{(3,269)}=3.922, p<.01$ )。多重比較 (Tukey 法) の結果、工学部 (平均 16.48 点) よりも地域学部 (平均 18.43 点) の得点の方が、また農学部 (平均 16.79 点) よりも地域学部 (平均 18.43 点) の得点の方が有意に高かった ( $p<.05$ )。工学部や農学部の学生より、地域学部の学生の方が、地元への愛着を強く持っていることが明らかになった。

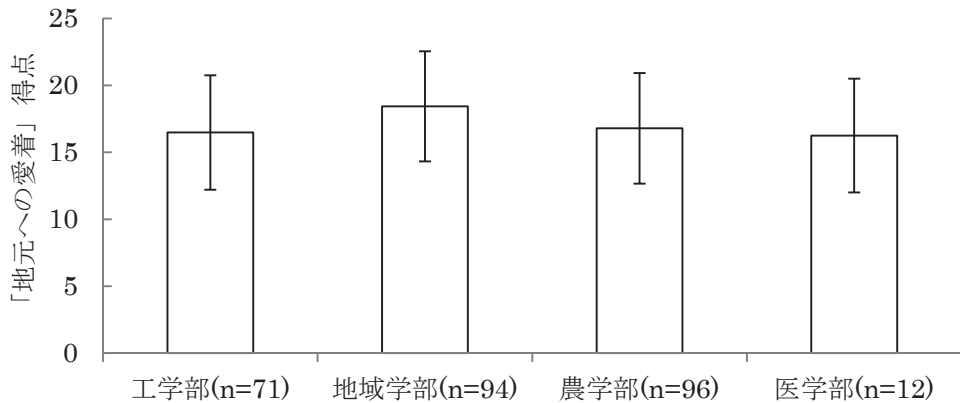


Figure 2. 学部ごとの「地元への愛着」得点の平均値

**地元志向の性差** 次に、性別の違いによって地元志向尺度の得点の高低に違いが生じるかどうかを明らかにするために、男女それぞれの「地元への定住志向」得点の平均値の差の検定を行った。 $t$  検定の結果 (Table 7), 男子学生 (平均 14.95 点) と女子学生 (平均 15.74 点) の得点の平均値の差に有意差はなかった ( $t_{(269)}=-1.418, n.s.$ )。性別の違いによって、地元への定住志向の強さには違いが見られなかった。

Table 7

t 検定の結果 (「地元への定住志向」得点の性差)					
性別	n	平均	標準偏差	t 値	df
男	145	14.95	4.397	-1.418	269
女	126	15.74	4.726		

そして、男女それぞれの「地元への愛着」得点の平均値の差の検定を行った。 $t$  検定の結果 (Table 8), 男子学生 (平均 16.72 点) よりも女子学生 (平均 17.87 点) の得点の方が有意に高かった ( $t_{(271)}=-2.242, p<.05$ )。男子学生よりも、女子学生の方が地元への愛着を強く持っていることが明らかになった。

Table 8  
*t* 検定の結果 (「地元への愛着」得点の性差)

性別	n	平均	標準偏差	<i>t</i> 値	df
男	147	16.72	4.109	-2.242*	271
女	126	17.87	4.309		

(注) \* $p < .05$

## 考察

### 地元志向の構成概念について

地元志向として仮定された2つの要素が因子として抽出されるかどうかを検討するために、地元志向尺度の全12項目に対する因子分析を行った。その結果、第1因子はQ2-1「将来地元とは環境が異なる場所で、生活してみたい」、Q2-2「できるだけ自分の育ったところからは離れたくない」、Q2-5「慣れ親しんだ場所であっても、地元にはずっと住むのは嫌だ」、Q2-6「基本的には、地元で長く腰をすえて生活した方がよい」、Q2-7「できるだけ親の近くにいたいと感じる」の5項目から構成され、地元への定住志向を示すものと解釈された。第2因子はQ2-8「友達のなかで、自分のことを最も理解してくれるのは地元の友だちである」、Q2-9「地元で暮らす人たちの人柄が好きである」、Q2-10「他のところにいるときよりも、やっぱり地元にいるときが落ち着く」、Q2-11「自分が地元の一員であるのを感じる」、Q2-12「地元について良いことや悪いことを言われると、自分のことのように感じる」の5項目から構成され、地元への愛着を示すものと解釈された。

本研究では地元志向が、地元で定住したいという気持ちを表す「地元への定住志向」と、地元における人や場所に対する愛着である「地元への愛着」の2つの要素から構成されるものと仮定して、地元志向尺度を作成した。因子分析の結果、ほぼ仮定通りの2因子が抽出された。しかし、「地元への愛着」を示す項目として作成したQ2-7（「できるだけ親の近くにいたいと感じる」）が、地元への定住志向を示すものとして解釈される因子に含まれた。Q2-7は、親への愛着も地元の人に対する愛着に含まれると考えられることから、「地元への愛着」の程度を尋ねる項目の一つとして作成された項目である。しかし、Q2-7は、親との情緒的な結びつきの程度というよりは、親との物理的な近接を求める程度を測定する項目内容となってしまっていたため、多くの回答者の親が住んでいると考えられる地元への定住志向を示す因子に含まれたと考えられる。よって、このことを考慮しても、2つの要素からなる地元志向尺度の因子的妥当性は確認されたと言える。

### 地元志向に影響する個人的特性について

次に、パーソナリティ、異文化志向、自民族中心主義、親子関係の4つの個人的特性が、それぞれ地元志向にどのように影響を与えているのか分析した結果の概略と、その考察を以下に記述する。本研究での考察は、結果における重回帰分析の回帰式のうち、一定の説明率を有したものについて行う。

**パーソナリティ** パーソナリティでは「多才の」「進歩的な」といった項目で表される開放性や、「温

和な「寛大な」といった項目で表される調和性が地元への愛着を強める影響を与えているという結果となった。和田（1996）は、Big Five 尺度と新性格検査（柳井・柏木・国生,1987；国生・柳井・柏木,1990）の12の性格特性尺度との関連を調査しているが、この調査の中で、開放性が新性格検査の「持久性」と関連を持つことを明らかにしている。ここから、「遊戯性」とも訳されることもある開放性が、飽きっぽいために次から次へと興味の対象を広げていく“遊び半分”の因子ではなく、さまざまな対象を追っていくだけの粘り強さをもつ“遊び追求”の因子であることを示唆している。このようなパーソナリティから表れる態度は、慣れ親しんだ環境だからといってそれに飽きてしまう態度ではなく、例えばそこから新たな楽しみ方を見出そうとするような、好奇心を持った態度だと考えられる。このような態度が、結果として地元への愛着を強めるのではないかと推測できる。

調和性は、Agreeablenessを訳した名称であるが、協調性と訳されることもある。この特性を持つ人は、地元という環境において周りの人々と協調しながら過ごしてきたことが予想され、その結果として地元への愛着に結びついたものだと考えられる。

いずれのパーソナリティについても、地元に限らずその個人を取り巻く地域への愛着を強めることが予想されるが、それをふまえても、地元志向の1つである地元への愛着と、個人的特性であるパーソナリティとの間に有意な関係が見られたことは、今後新たな発達モデルを構築していくうえで意義のある結果だと言えるであろう。

一方で、パーソナリティが地元への定住志向に与える影響については有意な関係が見られなかった。今回の結果からすると、パーソナリティは直接個人の地元を身を置きたいという気持ちにはつながらないが、地元への愛着を通じて間接的にそのような気持ちにつながるという可能性もあるため、今後検討していく必要があるであろう。

**異文化志向、自民族中心主義** 異文化志向、自民族中心主義については、異文化志向の強まりが地元への定住志向を弱める影響を与えており、自民族中心主義の強さが地元への定住志向、愛着の両方を強める影響を与えているという結果となった。異文化志向を測る尺度として、前村（2011）の作成した異文化志向尺度を用いて、地元への定住志向を測る尺度として、前村（2011）の作成した定住志向尺度の項目を、地元への定住に限定する内容に修正して用いた。どちらも前村（2011）の作成した尺度であるが、前村（2011）が、大学生のみを対象とせず、地域特性の異なる3地域の幅広い年代（平均年齢49.83歳（標準偏差=13.92））を対象とした点と、定住志向を地元に対するものに限らず、地元以外の特定の土地への定住志向も含んでいる点で本研究とは異なる。これらの違いはあったが、本研究の結果も、異文化志向が強い人ほど定住志向が弱い、という前村（2011）の仮説を支持するものとなった。異文化志向の強さが地元への定住志向を弱める影響を与えており、自民族中心主義の強さが地元への定住志向、愛着を強める影響を与えている、つまり反“自民族中心主義”の強さが地元への定住志向、愛着を弱める影響を与えているという結果は、岩田（1989）のコスモポリタニズムの2つの次元の強まりが、地元志向を弱める影響を与えていることを示している。

吉川（2001）の言うように、伝統的な共同体や地方のコミュニティの持続性を考えたとき、「故郷を離れる」発達モデルは、人材を枯渇させる呪縛として機能している。そのような中で地元志向の強い若者は、貴重な人材と言えるであろう。しかし、今回の結果を踏まえると、異文化志向が弱く、自民族中心主義的な態度の強い若者が、強い地元志向を有していると解釈することもできる。このような若者は、国際化の進む現状の中で「心の国際化」が進んでいない若者だと考えられ、貴重な人材ではあるが望ましい人材とは言えないと思われる。よって、新たな発達モデルを構築するうえ

では、コスモポリタニズムと地元志向の両立しうるような発達モデルを考えていく必要がある。

**親子関係** はじめに、親子関係が地元への定住志向に与える影響について考察する。まず、いずれの親との関係においても、1人の人間として親を認知している関係性が、地元への定住志向を弱める影響を与えているという結果となった。小高(2000)の親-青年関係尺度における「1人の人間として親を認知」の項目は、親からの精神的な独立を示す関係性を表しており、この関係性は心理的離乳を果たした関係性だと考えられる。本研究の結果では、この関係性が地元への定住志向を弱める影響を与えていることが明らかになった。つまり、親からの心理的な自立の不十分な若者が地元志向を強める傾向があるということである。これは、従来の地元志向の強い若者に対する否定的な評価を裏付ける結果ともいえる。しかし、若者たちの統合性と精神的健康にとって必要なのは、意地をはって両親から独立しているよりも、両親に対する自発的な、あるいは自由意志による依存であることを示唆する研究(Ryan & Lynch, 1989)もあり、親からの心理的な自立が不十分とはいっても、一概に否定的な評価を下すことには慎重さを要する。よって、今後は親からのどのような自立が望ましいのかといったことと関連付けながら、地元志向を捉えていく必要があるだろう。

また、母親との親子関係において、母親からポジティブな影響を受けている関係性が、地元への定住志向を強める影響を与えているという結果となった。「母親からのポジティブな影響」の項目は、母親が自分の生き方のモデルとなっている関係性を表している。このような関係性は、母親との仲が良好な関係性のように感じられ、それが母親との物理的な近接へとつながっていると考えられる。しかし、回答者が青年期の若者であることを考慮すると、「母親からのポジティブな影響」の項目に見られるような関係性は、単純に母親との仲が良好なだけでなく、親の権威に盲従するフォークロージャー型とも捉えられる。よってこの結果も、従来の地元志向の強い若者に対する否定的な評価を裏付ける結果と言えるであろう。

次に、親子関係が地元への愛着に与える影響について考察する。まず、いずれの親との関係においても、情愛的な絆を感じている関係性は、地元への愛着を強める影響を与えていた。「親との情愛的な絆」の項目で表される親子関係は、親への感謝の気持ちを感じている関係性である。自分を育ててくれた親に対してこのような気持ちを抱くことは、自分の育ってきた環境である地元における人や場所に対しても同じような気持ちを抱くことにつながると仮定される。

また、一人の人間として親を認知している関係性は、地元への愛着を弱める影響を与えているという結果となった。この結果を直接解釈するのは難しい。そこで、この結果を地元との物理的な隔離との関連の中で考えてみる。

西平(1990)は、第2次心理的離乳を促す要因は、大学入学または就職による、両親の家から離れ、寮、下宿に移る経験であり、この物理的な隔離なしに心理的離乳を完成させることは、非常に困難であろう、としている。今回対象となった鳥取大学の大学生の多くは、両親の家から離れて暮らしており、彼らの認知する地元との物理的な隔離があると考えられる。このことを考慮すると、地元との物理的な隔離が、彼らの親からの心理的離乳を促しており、さらに、その物理的な隔離によって地元ではない地域、つまり鳥取と言う地域に対して徐々に愛着が湧いてきて、相対的に地元への愛着が弱まっているという可能性が示唆される。こうした可能性は本研究のデータからは実証できないが、進学や就職の機会に地元から離れて暮らすことが心理的離乳や地元への愛着に与える影響について明らかにすることは、新たな発達モデルを考えるうえで意義のあることだと考えられるため、今後明らかにしていく必要がある。



## 今後の課題

本研究では、地元志向を「地元への定住志向」、「地元への愛着」の2つの要素から構成されるものと仮定したうえで地元志向尺度を作成し、調査を行った。その結果、確かに因子的妥当性は確認されたが、地元志向尺度は、質問項目の候補を収集し、予備調査を経た上で項目を決定するといった手続きを取っていないため、地元志向の全容を捉えられているかどうか疑問が残る。「故郷を離れる」発達モデルにあてはまらない若者の発達を考えるうえで、地元志向を構成する要素を正しく捉えることが必要となる。今回の調査では、親からの精神的な自立を表す「1人の人間として親を認知」している関係性が、本研究で仮定された地元志向の2つの要素を弱める結果となったが、これは逆に言えば親からの自立ができていない者は地元志向が強いという結果である。この結果を地元志向の現状として理解するのであれば、精神的な未熟さという点において、地元志向の強い者への否定的な評価へとつながる。つまり、このような理解は、地元志向の強い者への従来の評価を実情が反映されたものとして見るということであり、この見方によれば、新たな発達モデルの構築が急がれることとなる。しかし、仮に親からの精神的な自立によって左右されない地元志向の要素があるとすれば、今回の結果が地元志向の現状であるとは言い切れない。よって、まず地元志向を構成する要素の全容を明らかにすることが今後の課題となる。

また、地元志向の現状について調査するために、個人的特性が地元志向にどのような影響を与えているかを分析した。しかし、実際にはどちらが原因となり、結果が生じるのか、発達より早い段階での関係性を把握することが、地元志向を捉える上で重要となってくると思われる。このことを考慮しつつ、今後は子どもが発達の中でそれぞれの地元をどのように捉えていくか、そして地元志向がどのように変化していくのかといったことを調査していく必要がある。

今後新たな発達モデルを構築していく上では、本研究から得られた地元志向に関するデータをふまえて、これからの社会にとって、そして個人にとってどのように発達していくことが望ましいかということを中心に問い続けながら構築していくべきであろう。

## 謝辞

質問紙調査を実施するにあたって、講義中の実施をご快諾頂いた児島明准教授、高取憲一郎名誉教授に感謝いたします。また、講義中に質問紙調査に回答して下さいました学生の皆様にも感謝いたします。

## 引用文献

- 相羽康郎・池上龍太郎・君島秀郎・戸沼幸一（1977）. 居住地に関する研究スプロール地区における居住者の定住・転居類型と住宅地計画（1）居住者の定住志向類型と居住者の心理傾向——東武伊勢崎線沿線を中心として 日本建築学会関東支部研究報告集, 49, 373-376.
- Bronfenbrenner .U.(1979) . *The ecology of human development*. Harvard University Press. (U.ブロンフェンブレンナー 磯貝芳郎・福富護（訳）（1996）. 人間発達の生態学 川島書店)
- Erikson,E. H.(1959). *Identity and the life cycle*. Norton and Company, Inc. (E. H. エリクソン 西平直・中島由恵（訳）（2011）. アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 林智幸（2013）. ビックファイブ 日本発達心理学会（編） 発達心理学事典 丸善出版 pp.438-439.

- 樋口美雄 (2004). 地方の失業率上昇の裏に若者の地元定着増加あり 週刊ダイヤモンド 3月20日
- Hollingworth, L. S.(1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.
- 池田幸恭・大竹裕子・落合良行 (2006). 「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説 筑波大学心理学研究, **31**, 45-57.
- 石黒格 (2007). 青森県出身者の県外進学に関わる要因: 県内外進学者の比較から 人文社会論叢社会科学篇, No.18, 69-79.
- 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子 (2012). 「東京」に出る若者たち—仕事・社会関係・地域間格差 ミネルヴァ書房
- 岩田紀 (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討 社会心理学研究, **4**, 54-63.
- 神村栄一 (1999). パーソナリティ 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁樹 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 pp.686-687.
- 吉川徹 (2001). 学歴社会のローカル・トラッカー—地方からの大学進学 世界思想社
- 国生理枝子・柳井晴夫・柏木繁男 (1990). 新性格検査における併存的妥当性の検証—プロマックス回転法による新性格検査の作成について (II) — 心理学研究, **61**, 31-39.
- 小高恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, **46**, 333-342.
- 小高恵 (2000). 親—青年関係尺度の作成の試み 南大阪大学紀要, **3**, 87-96.
- 前村奈央佳 (2011). 移動と定住に関する心理的特性の検討: 異文化志向と定住志向の測定および関連性について 関西学院大学先端社会研究所紀要, No.6, 109-124.
- Mercia, J. E.(1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 並河努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之 (2009). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, **83**, 91-99.
- 西平直喜 (1990). 大人になること—生育史心理学から 東京大学出版会
- Oishi, S. & Schimmack, U.(2010). Residential mobility, well-being, and mortality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **98**, 980-994.
- 太田聡一 (2003). 若者はなぜ「地元就職」を目指すのか エコノミスト 8月5日
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- 小沢一仁・湯沢理恵子 (1989). 青年期の心理的離乳と同一性—心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関連— 帝京学園短期大学研究紀要, **3**, 63-74.
- Rogoff, B.(2003). *The cultural nature of human development*. Oxford University Press. (バーバラ・ロゴフ 當眞千賀子 (訳) (2006). 文化的営みとしての発達—個人, 世代, コミュニティ 新曜社)
- Ryan, R. M. & Lynch, J. H.(1989). Emotional autonomy versus detachment: Revisiting the vicissitudes of adolescence and young adulthood. *Child Development*, **60**, 340-356.
- Sumner, W.G. (1906). *Folkways: A study of the sociological importance of usages, manners, customs, mores, and morals*. (サムナー 青柳清孝・園田恭一・山本英治 (訳) (1975). フォークウェイズ (現代社会学大系3))
- 高木秀明・藤田仁美 (1988). 親子関係と青年の自己意識—自我同一性, 自尊感情との関連— 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 360-361.
- 谷井淳一・上地安昭 (1993). 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, **26**, 113-122.

和田さゆり（1996）．性格特性用語を用いたBig Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.

柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子（1987）．プロマックス回転法による新性格検査の作成について (I) 心理学研究, **58**, 158-165.

(2015年1月30日受付, 2015年2月4日受理)